

(Unas) pocas veces
—不定数量詞pocoの語用論的解釈—

二宮 哲

(Unas) pocas veces
—Unas interpretaciones pragmáticas sobre el cuantificador indefinido poco—

NINOMIYA Satoshi

El cuantificador indefinido *poco* se interpreta negativamente en el contexto en el que aparece. En este trabajo, investigamos el sistema en el que surge su negatividad.

Por otra parte, Ninomiya (2018, 2020) aclara que no se usa *unas veces* en ninguna construcción a excepción de algunas locuciones. La expresión parecida, *unas pocas veces*, sin embargo, se puede emplear en las mismas construcciones en las que no se admite *unas veces*.

En el presente trabajo, aclaramos las condiciones pragmáticas en las que aparecen los cuantificadores indefinidos *poco* y *un poco*.

A través de nuestra investigación llegamos a las siguientes conclusiones:

- (1) *Poco* denota cantidad escasa respecto de lo regular y, pragmáticamente, se utiliza cuando el hablante no necesita identificar el objeto del que habla.
- (2) *Un poco* denota cantidad pequeña y, pragmáticamente, se utiliza cuando el hablante identifica el objeto o el grupo como partitivo, no como específico, como ocurre en el caso de *unos*.

0.

(1a) は *poco* を含んだ文・節を肯定的に解釈し、(1b) は否定的に解釈することが望まれる¹。

- (1) a. *Tiene un poco (de)² dinero³. / Tiene unas pocas monedas.⁴*
彼はお金を少し持っている / 彼は少しだけ小銭を持っている。⁵
- b. *Tiene poco dinero. / Tiene pocas monedas.*
彼はお金を少ししか持っていない / 彼は小銭を少ししか持っていない。

poco が否定語であると解釈されたとしても⁶、動詞の否定の欠如により、(1b) は肯定文である。この否定性はどのような意味・統語構造より生じるのであろうか。

従来のスペイン語教育では、管見の限り、この点に関して論理的な説明を与えずに (1) のような解釈をすることを基本としている⁷。もちろんこの日本語訳の肯定・否定の問題にはスペイン語側ではなく、日本語における表現の制約も関わっていることは疑いのないことである。

本論では *poco* の意味を考察した後、*poco* が用いられる文の解釈の妥当性を検証し、*poco* を含んだいくつかの名詞句の振る舞いについて語用論的記述の追加を試みる。

1. *poco* の意味

Dle には以下のような意味の記述がある。興味深いのは *poco* の項中の語義の

-
- 1 例えば、(西和) では *poco* の語義説明に *poco* に不定冠詞が前置する場合 (*un poco, unos pocos*) に関しては「肯定的」、裸で現れる場合には「否定的」というラベルを付している。
 - 2 この種の表現では *de* を伴い、*un poco* は代名詞として使用されるのが一般的である。
 - 3 ターゲットの名詞句を欧文中ではイタリック体にし、邦文中では下線を付す。
 - 4 例文末に出典がっていないものは筆者が作成しネイティブのチェックを受けたものである。
 - 5 例文の日本語訳は筆者が作成した。
 - 6 寺崎 (1998: 148) では、*no* と同じく否定語の副詞・限定詞と分類され、Bosque/Demonte (1999: 2609) では *inductor negativo* とされている。
 - 7 英語の *[little/a little]*, *[few/a few]* の解釈も同様であるため、教育的にはその延長として特に疑義を挟む余地がないのだろう。

一部ではなく、定型表現 (locución) として (2b) un poco, (2c) unos pocos, unas pocasが立てられていることである⁸。

(2) a. poco

1. adj. indef. En número, cantidad o intensidad escasos respecto de lo regular, ordinario o preciso. *Pocos armarios. La poca agua que había. Poco peligro.* (イタリックは原文のママ、以下同)
「数量が⁹一般的なものに比して乏しい」

b. un poco

1. loc. adj⁹. Con nombres no contables, denota cantidad pequeña. U. seguido de la preposición *de*. *Un poco de pan. Un poco de seriedad.*
「不可算名詞とともに量が少ないことを示す。前置詞の*de*が後続して使用される」

c. unos pocos, o unas pocas

1. locs. adjs. Algunos o varios. *Unos pocos libros. Unas pocas amigas.*
「algunosあるいはvariosと同義」

(2a-c) の意味を見ると同じpocoを用いた表現であるにもかかわらず、常に単なる数量を表すわけではなく、それぞれに違ったニュアンスが加わることが見て取れる。

冠詞unも数量詞pocoも不定であることが共通の特徴である。一般的に不定冠詞と不定数量詞が共起することはなく、その他の不定の数量詞で不定冠詞と共起できるのはtantoのみである (Leonetti 1999b : 846) ¹⁰。

8 この点において、日本語の辞書はpocoとun poco, unos pocosを別「語義」として立てるだけで、同列に配置しているのが理解を不安定にしているひとつの要因であると考えられる。un poco, unos pocosは定型表現として一般的なpocoの意味とは異なる意味になるという扱いの方が注意を喚起するにはよいように思われる。

9 代名詞の語義の記述も続くが類似した内容であるため省略する。続くc.でも同様。

poco単独の語義で重要なポイントは(2a)「一般的なものに比して」乏しい、という点にある。想定された基準があり、それよりも少ない、という含意がある。Sánchez (1999) ではこの含意を説明するために以下のような例文が挙げられる。

- (3) Juan tiene {*pocas*/*muchas*/*demasiadas*/**unas*/**algunas*} perspectivas de trabajo, si piensas en su edad y su preparación.
(Sánchez 1999 : 1047) (イタリックは筆者)
フアンは彼の年齢と経験を考えれば、仕事のことを あまり分かっていない (*pocas*) /よく分かっている (*muchas*) /分かりすぎている (*demasiadas*) }。
- (4) —¿Me compras un helado?
アイスを買ってくれる?
a. Tengo *poco dinero*. Lo siento. No puedo comprarlo.
あまりお金がないんだ。ごめんね。買えないや。
b. Tengo *un poco de dinero*. Te lo compraré.
お金は少しだけ持っているから、買ってあげよう。
(Sánchez 1999 : 1100) (イタリックは筆者)

以上の例文で想定された基準はそれぞれ(3) en su edad y su preparación (彼の年齢と経験)、(4) un helado (アイスクリームの値段)である。その基準よりも少ないことをpocoは示す。また(3)では*pocas*のような「想定された基準数量よりも乏しい」という含意が*unas*や*algunas*にはないことが分かる。つまりそれらはun poco, unos pocosと同様存在を提示する一般的な数量詞であると考えられる。(4)では返事にpocoを使用するとアイスクリームが買えないこと、つまり、お金が買える基準に満たないことがわかり、un pocoだと「少しあるの」で、アイスクリームが買えるという肯定的な返事が可能になることが見て取れる。

したがって、(1b) Tiene *poco dinero*.を「想定された基準数量よりも」乏しいというニュアンスに則して考えてみると「彼は想定する額に満たない額のお

10 Su intervención en el debate resultó *un tanto chusca*. (西和)
彼[彼女]が討論に加わってきたのはいささか滑稽だった。

金を持っている」＝「彼はそれほどお金を持っていない」ということになる。したがって「彼は少ししかお金を持っていない」という訳は適切であるということになる。

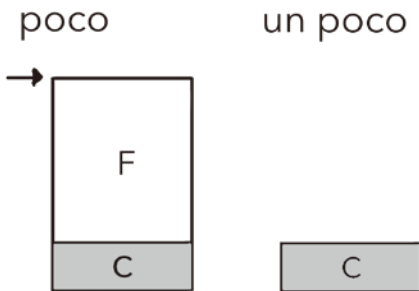
ただし、この「一般的なものに比して乏しい」＝「それほどない」は日本語において述語を否定できる場合の言い換えである。例えば以下にあげる西和の(5a) poco más deの定型表現の語義では「想定された基準数量よりも」という本来のpocoの意味を表そうとして「(...より) それほど多く [少なく] はない」と表現している。ただし(5a)の例文のように述語を含まない用例の中で使用された場合の日本語訳にはそのニュアンスを反映することは難しく(5b)のun poco másの訳と変わらない。

(5) a. *poco más [menos](de...)*(...より) それほど多く [少なく] はない。
desde hace *poco más de un mes* 1ヶ月ちょっと前から
(西和) (下線は筆者)

b. Si no tienes suficiente, añádele *un poco más de sal*.
もし塩が足りなければ、少し足してください。
(西和) (下線は筆者)

このpocoとun pocoの関係を図で示すと以下のようなになる。

図1



pocoの図の矢印は想定された基準数量

C (cantidad) : pocoと共起する名詞句の指示対象の数量

F (alta) : 想定された基準数量と指示対象の数量の差 = 足りない数量

pocoは想定された基準数量が常に意識され、同時に図中のFおよびCが意識されることになる。「想定された基準数量よりも乏しい」＝「それほどない」でも分かる通り、F、Cの両者が常に意識されていないとこの表現は不可能である。それに対してun pocoは単に名詞句の「数量が少し」の指示対象Cを提示するのみである。

これはButt/Benjamin (1994: 109)、廣康 (1999: 124)、寺崎 (1998: 148) が示すように副詞としてのpocoが、修飾する形容詞に対して否定語として振舞うこともひとつの証拠となる。

- (6) a. Estoy poco acostumbrado al trabajo manual.
= 'I'm not used to manual labor' 私は手作業に慣れていない (不慣れである)。
- b. El argumento es poco convincente.
= 'The argument is unconvincing' 議論は説得力がない。
(Butt/Benjamin 1994: 109)

以上(6)は図1において、Cの指示対象、ここでは形容詞の表す質(6a. 慣れている、6b. 説得力がある)が想定された基準に達しないことになる。形容詞の場合、Fの足りない部分はCでないこと($\neg C$)となり、(6a) 慣れていないこと、(6b) 説得力のないこと、である。したがってpoco Cの場合、 $\neg C (=F)$ が前面に出ることになる。CとFを比較すれば、Cの程度が低い(poco)場合、Fが優位となるということだ。したがって上記のように日本語では形態的に変化させて(6a) 不慣れとするか、(6b) のように述語を否定して否定的に訳される。

以上のように考えると、日本語には「想定された基準数量よりも乏しい」を表す図1のpocoを語あるいは句のみで表現する手立てがなく、述語の形態・語彙的否定を合わせて「それほど～ない」「少ししか～ない」と表現するしかない。これが(1b)の否定的な解釈を導き出す原因であると考えられる。したがって、述語と直接結び付きにくい(5a)のような句の中では図1のpocoをうまく訳出できないことになる。

2. pocoの語用論的機能

2. 1 unos pocos

以上1.のように考えれば、(1a, b)の日本語解釈における否定性は理解できたように思われるが、問題はそれほど単純ではない。(1), (2c)のunos pocosの解釈についても以上に加えながらさらに考察を進めたい。

- (7) a. ...la esposa de éste y Maribel, su hijita, estaban en el jardinillo con *unos pocos amigos* que intentaban dar apariencia de normalidad a una despedida... (Cre, prensa)
この男の妻と娘のマリベルは、別れに際して普段通りでいようと
するわずか数人の友達と一緒に庭にいた。
- b. América escoge un vestido que sólo se ha puesto *unas pocas veces*. (Cre, novela)
(キャプテン・) アメリカはほんの数回だけ着たことがあるだけの
のスーツを選ぶ。

(7a, b)ともにunos pocos「わずかいくつかの」という意味になる。これは1.で考察したun pocoの数量詞的解釈と同様と考えて問題なさそうである。しかし、不定冠詞unと不定数量詞pocoは以下で見るとような語用論的機能の相違を持つ。

2. 2 un(os) とpoco(s) の語用論的機能の衝突

拙稿(2018, 2020)では、以下の(8)冠詞出現の語用論的条件を用いて、不定冠詞および不定数量詞algunoの用法を語用論的に考察し(9), (10)のような考察結果が導き出された。

- (8) (無)冠詞・数量詞の語用論的分析 (一部改変)
- a. 冠詞の基本的な機能：
定冠詞/不定冠詞の基本的な機能は、それを伴う名詞句の「既知/
未知」の情報を話し手が聞き手に明示することである。
- b. 定冠詞の出現に関する談話条件：
聞き手が対象を同定できる、と話し手が判断する場合。
- c. 不定冠詞の出現に関する談話条件：

- i. 聞き手が対象を同定できない、と話し手が判断する場合。
 - ii. (疑問文・命令文などで) 話し手が対象を同定できない場合。
 - d. 裸名詞句・不定数量詞の出現に関する談話条件：
話し手が対象を同定する必要がない場合。
 - e. 対象を同定するための談話条件：
定名詞句の指示が談話内で正確に伝わるためには、「定の領域」での当該名詞句の「唯一性」が保証されなくてはならない。
- (9) a. un(os)は、話し手が対象の同定に関心があり(平叙文では同定し、命令・疑問文では同定しない)、聞き手が対象に持つ同定可能性の判断も話し手は考慮に入れる。
- b. algún(os)は、話し手が対象を同定する必要がない場合であり、聞き手が対象に持つ同定可能性の判断には無関心である。
- (10) unos は個 (específico) の集まりを示し部分 (partitivo) を指すことは困難だが、algunosは個の集まりは示さず全体の中の部分を示す。

(9a) において、不定冠詞は「話し手が対象の同定に関心がある」ことが確認されている。しかし(9b) 不定数量詞のalgún(os)は「話し手が対象を同定する必要がない場合」となり、同じ不定数量詞のpocoがalgún(os)と同じ語用論的機能を備えたとすれば、un pocoの連続の中では話し手の対象の同定への関心の有無について機能の衝突が起こることになる。

3. 考察

そこで、拙稿(2018)で行った上記の機能を確認する試験を再検討してみよう。

- (11) a. A : (Por teléfono) ¿Con quiénes estás ahora?
(電話で) 今、誰といるの?
- B : Estoy con {un amigo/unos amigos/^{??#11} algún amigo/^{?#} algunos amigos}.
- {ある友達/友達何人か} といるんだよ。
- b : A : En aquel entonces, siempre estabas en aquel bar, ¿verdad?
あの当時君はいつもあのバルにいたよね?

B : Sí, estaba allí con {*un amigo/unos amigos/algún amigo/ algunos amigos*}.
はい、{ある友達 (un, algún)/友達何人か (unos, algunos)}
としました。

(11a) はAが電話先の相手Bに誰といるのか尋ねる状況で、Bが実際に目の前に友人がいる状況で、「ひとりあるいは何人かの友人といる」と答えている。目の前に対象がいる場合にはBは対象を同定せざるを得ないので*un (os)*が用いられるのが一般的であり、*algún (os)*は語用論的に逸脱する。それに対して(11b)は過去における記憶の同定であるからB自身にも対象の同定が定かではない場合がある。そのため(11b)では*algún (os)*が受容可能となる。

同様に時間的(イベントの)同定に関しても以下の試験で確認した。

(12) a. A : ¿Cuántas veces has estado en Japón este trimestre?

君はこの3ヶ月間に何度日本に行きましたか?

B : He estado allí {*una vez*/^{??#}*unas veces*/^{??#}*alguna vez*/^{?#}*algunas veces*}.

{一度/^{#12}数度} そこに行きました。

b. A : ¿Conocías el bar que estaba allí en los sesenta?

君は60年代にあそこにあったバルを知ってた?

B : Sí, estuve allí {*una vez*/[#]*unas veces/alguna vez/algunas veces*}.

はい、{一度 (*una*) /いつか (*alguna*) /何度か (*algunas*)}
そこに行きました。

11 # の記号は、非文ではないが当該の文脈の中ではふさわしくない用例に付す。またその前の? は数が多いほど文脈上違和感が増すことを表す。? の多少は当該の文中で他の選択肢との違和感の差を指し、妥当性を示すことが難しいため他例文の選択肢との比較は指さない。

12 日本語では問題ないが、スペイン語では*unas veces, alguna vez, algunas veces*とした場合に語用論的逸脱があることを示す。

(12a) では比較的近い時間 (este trimestre : この3ヶ月間) の経験を、(12b) ではずっと以前の経験を問う例文である。やはり近い記憶 (12a) ではイベントを同定せざるを得ないので *alguna(s)* を用いることは語用論的に難しく、遠い記憶 (12b) ではそれが可能であった。またここで *una(s)* と *alguna(s)* の差異の問題とは別に *unas* が遠近両方の記憶で逸脱することが確認された。

そこで、*unas veces* が時間的同定の全てで語用論的に排除される理由を以下のように考えた。

- (13) 存在する事象の回数を表す *vez* は *unas* と共起すると、話者が同定できるはずの事象の回数を「数回、何回か」と意味的に敢えて不確定に表すことになり、「文意と *unas* の機能の間の矛盾」が起こるのではないか¹³。(拙稿 2020)

以上を踏まえ、(11), (12) と同じ試験を *unos pocos amigos*, *unos cuantos amigos* および *unas pocas veces*, *unas cuantas veces* で行った。その結果上記全ての試験で語用論的に受容可能であることが確認された。

- (14) a. A : (Por teléfono) ¿Con quiénes estás ahora?
B : Estoy con {*unos pocos amigos/unos cuantos amigos*}.
数少ない友達何人かといふんだよ。
- b : A : En aquel entonces, siempre estabas en aquel bar, ¿verdad?
B : Sí, estaba allí con {*unos pocos amigos/unos cuantos amigos*}.
はい、友達ほんの数人といいました。
- (15) a. A : ¿Cuántas veces has estado en Japón este trimestre?
B : He estado allí {*unas pocas veces/unas cuantas veces*}.
ほんの数回そこに行きました。

13 例えば *Cre* では *unos /dos/tres/cuatro/ amigos* は存在しない。*unos cinco amigos* は1例のみ存在する。これも同様に「話者が容易に同定できるはずの人数を『数人、いく人か』と意味的に敢えて不確定に表すことになり、『文意と *unos* の機能の間の矛盾』が起こることが原因であろう。

- b. A : ¿Conocías el bar que estaba allí en los sesenta?
B : Sí, estuve allí {*unas pocas veces/unas cuantas veces*}.
はい、ほんの数回そこに行きました。

以上の結果より、以下のことが問題となる。

- (16) a. 不定冠詞un(os)の語用論的条件「話し手が対象の同定に関心がある」が(14), (15)の全ての例で機能しているのか。そうだとすれば、どのように機能しているのか。
- b. 不定数量詞poco(s)は語用論的条件「話し手が対象を同定する必要がない」が(14), (15)の全ての例で機能しているのか。そうだとすれば、どのように機能しているのか。
- c. 以上a, bの「話し手が対象の同定に関心がある」と「話し手が対象を同定する必要がない場合」の衝突が回避されるとすれば、どのような条件下でそれが可能なのか。

まず、(16a)についてであるが、全ての例における指示対象の数量が少ないことから各個体を同定可能だと考えて、全ての例で同定しているとみなすことに問題はないが、(12)の例で*unas veces*が語用論的に逸脱することと衝突してしまう。

次に(16b)について考えると、以上の(16a)で考えたように指示対象の数量が少ない例の中で、*unos pocos*ではそれらの対象を同定しない、ということになる。不定冠詞*unas*がない*pocos amigos*, *pocas veces*でもやはり対象を同定していないのだろうか。

- (17) a. Tiene *pocos amigos* y muy escogidos. Lo que sí vemos es que se le acercan muchos petardos, gente que quiere que le vean a su lado porque es el hijo del presidente. (Cre, prensa)
彼にはあまり友達はおらず、選び抜かれたものだけだ。分かっているのは、たくさんのどうでもいい奴ら、彼が社長の息子なので彼のそばにいたい奴らが彼に近づくということだ。

- b. "Escalona", "Pasiones secretas", "Caballo viejo" y "La potra zaina" han sido vistas no sólo en Latinoamérica, sino también en España e incluso en Rusia. No obstante, *pocas veces* un producto colombiano había encontrado un terreno tan abonado a la hora de ofrecerse a la venta como en el caso de "Café". (Cre, prensa)

“Escalona” や “Pasiones secretas”, “Caballo viejo”, “La potra zaina” (コロンビアのテレビドラマ) はラテンアメリカだけではなく、スペインやロシアでも見られてきた。しかし、“Café” の場合ほど提供と同時に恵まれた場所を見つけたコロンビアの作品はめったにない。

改めて以上を観察すると、やはり図1で見た通り、C (amigos, veces) が想定基準に比べて乏しいことを、Fを意識しながら述べるものであり、対象の個に関して同定をすることが問題なのではないことが分かる。特にbの例では“Café” のようなケースがあったことを述べたいのではなく、そのようなケースが無かったことを述べたいのは明白であろう。

これは拙稿 (2018, 2020) の結論の一部である (10) で示した全体と部分の問題にも関連する。また統語的には代名詞として単独で機能できるかという問題と関連している。

- (18) a. *unos de los amigos, uno de los amigos
b. algunos de los amigos, alguno de los amigos
c. *pocos de los amigos, *poco de (l) dinero
d. unos pocos de los amigos, un poco de (l) dinero

以上の例を見ると、unos, poco(s)は単独で、つまり代名詞として後続する集合 (los amigos, (el) dinero) 全体の部分を示すことができない (a, c)。それに対してuno, alguno(s), un (os) poco(s)は全体の部分を示すことができる (b, d)。つまり、不定冠詞un (os)を部分解釈が要求される文意の中で使用すると語用論的にも許容可能になると考えられる (d)。

これは拙稿 (2020) で示した (12) のunas vecesが現れにくい傍証ともなる。unas veces単独で「数回、何回か」と表現することは (13) 「話者が同定でき

るはずの事象の回数を『数回、何回か』と意味的に取替えて不確定に表すことになり、『文意とunasの機能の間の矛盾』が起こる』と考えることができる。しかしあえてunas vecesに部分解釈を要求する以下のような例文では問題なく使用できるからである。

- (19) Casaus opina que en deporte *unas veces* se gana y otras se pierde.
スポーツでは勝つこともあれば負けることもあるとカサウスは述べている。 (Cre, porensa)

(19) では*unas veces*が後続の*otras*と併用されることで「全体の何回かの部分では勝ち、その他の部分では負ける」という部分解釈を要求されるため語用論的に受容可能となる。

この場合、不定冠詞の「話者が対象を同定する」語用論的機能は「全体の中の部分を同定する¹⁴」面で維持されることが考えることができる。個の同定ではない用法として (18c, d) や以下 (20) で見るようにun pocoが不可算や総称の名詞の部分を目指す例を挙げることができる。

- (20) a. El presidente tomó *un poco de la medicina*. (Cre, prensa)
首相は薬を少し飲んだ。
- b. No lo cocine más de ese tiempo o las guayabas se pondrán muy blandas. Deje enfriar en el almíbar. Para presentarlas, sírvalas en compoteras, con *un poco del almíbar*. (Cre, prensa)
その時間以上は煮ないでください。そうしないとグアバがとても柔らかくなってしまいます。シロップに漬けて冷ましてください。出すときにはコンポート皿に入れて、少しシロップをかけて出してください。

こう考えると、(16) に関しては、不定冠詞が「部分全体を同定する」機能

14 部分は、同定されている全体の部分と考えられる時点で同定されているともいえるので、この議論で不定冠詞がun pocoの中で語用論的に「話者が対象を同定する」機能を果たしているのかどうかは今後の研究材料として残す。

を果たし、一方で (17) に関しては、不定数量詞は「個の同定には関与しない」という説明で両者の衝突を回避できることになる。

このようにして部分解釈が成立することにより、*unas veces*には困難な、同定可能である数少ないイベントの提示を*unas pocas veces*は可能にするのである。

4. まとめ

以上で見たように *poco* は「想定される基準より少ないことを指す」不定数量詞である。名詞句の指示対象の数量を示すのではなく、「想定される基準より少ない」ことを指し、同時に想定された基準をも話者は含意することになる。これは (8d, 16b) で示した不定数量詞の語用論的条件「話し手が対象を同定する必要がない場合」に則している。

それに対して *un (os) poco (s)* は数量が少ないことを示す一般的な数量詞であり、元来の不定冠詞 *un* の語用論的機能のひとつである (8c) 「聞き手が対象を同定できない、と話し手が判断する場合」を語用論的には含意している。肯定文においては、話し手は対象を同定している。しかしその同定の仕方は 3. で述べた通り「全体の中の部分の同定」であり個の同定ではない。*un* が加えられることで *poco* の本来の語義である「少量」を示すことに加えて、話し手は名詞句の対象を同定し、対象を同定していない聞き手に対して対象を提示する機能を果たす。

資料体

Dle : Diccionario de la lengua española, Edición del tricentenario, Actualización 2019
(<https://dle.rae.es>)

Cre : Corpus de Referencia del Español Actual (<http://corpus.rae.es/creanet.html>)

西和 : 『小学館西和中辞典・ポケプロ和西辞典』, 2010, MONOKAKIDO.

参考文献

- Alarcos Llorach, E. (1994), *Gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe.
- Álvarez Martínez, M. Á. (1986), *El artículo como entidad funcional en el español de hoy*, Madrid, Gredos.
- Bosque, I. (ed.) (1996), *El sustantivo sin determinación*, Madrid, Visor Libros.
- Bosque, I. / Demonte, V. (eds.) (1999), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe.
- Butt, J. / Benjamin, C. (1994), *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Second edition, London / New York, Arnold.
- 廣康好美 (1999), 「スペイン語の副詞とその機能 2—数量副詞 poco—」, 『神奈川県立外語短期大学紀要 総合編』, 21, pp.115-130.
- 栗林ゆき絵 (2003), 「algunoを伴う名詞句における数の問題」, 『イスパニカ』, 47, pp.37-52, 日本イスパニヤ学会.
- Laca, B. (1999) «Presencia y ausencia de determinante», en Bosque, I. / Demonte, V. (eds.) (1999), pp.891-928.
- Leonetti Jungl, M. (1990), *El artículo y la referencia*, Madrid, Taurus Ediciones.
- (1999a), *Los determinantes*, Madrid, Arco Libros.
- (1999b), «El artículo», en Bosque, I. / Demonte, V. (eds.) (1999), pp.787-890.
- 二宮哲 (2001), 「«Los perros que ladran no muerden» —定冠詞を伴う名詞句の総称表現について—」, 『スペイン語学研究』, 16, pp. 1-17, 東京スペイン語学研究会.
- (2015), 「第3章 冠詞」, 『スペイン語学概論』, くろしお出版.
- (2018), 「Un(os) y algún(os) ~数量詞に関する語用論的特徴のモデル化に向けて~」, 『スペイン語学研究』, 33, pp. 85-100, 東京スペイン語学研究会.
- (2020) (印刷中), 「{|Una ~ alguna} vez のいくつかの用法について —不定語の語用論的分析—」, 『スペイン語学研究』, 35, 東京スペイン語学研究会.
- Real Academia Española (RAE) (2009), *Nueva gramática de la lengua española*. Morfología Sintaxis I, Cap. 14 y Cap. 15, Madrid, Espasa Calpe.
- 坂原茂 (1996) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」, 『認知科学』, 3- 3, pp. 38-58, 日本認知心理学会.
- Sánchez López, C. (1999), «Los cuantificadores: Clases de cuantificadores y estructuras cuantificativas», en Bosque, I. / Demonte, V. (eds.) (1999), pp. 1025-1128.
- 寺崎英樹 (1998), 『スペイン語文法の構造』, 東京, 大学書林.

